

# 美禰子の歩き方、赤シャツのしゃべり方 — 漱石作品における「女らしい」「男らしい」の意味 —

高崎 みどり

## 1. はじめに

夏目漱石のいくつかの作品（注）において、「女らしい」「男らしい」の2語が、登場人物に対してどのように使われているのかを調べてみた。この「女らしい」「男らしい」という一対の言葉は、ジェンダー（文化的・社会的性役割）を意味内容として持つ語ということから見れば、典型的なものと言ってよいかと思う。これらの語を使うこと自体、あるいは、何に、どんな意味で使うかにも、使い手のジェンダーについての意識を見てとることができるだろう、と考えた。

ジェンダー概念というのは、近年の考え方ではあるけれども、これらの語自体は、100年前にもあったわけで、漱石がどんなふうに使っているかをまず調べ、そこから、漱石のジェンダーに関する意識はどのようなものか、ということを探ってみたいと思う。

以下で、用例を調べた結果、女性登場人物が「女らしい」場合、必ずしもプラス評価ばかりで描出されていない等、女性に対してはジェンダーにとらわれぬ用法が見られた一方、男性登場人物が「男らしくない」場合はマイナス評価で描出されている等、男性に対しては、ジェンダーに拘泥する用法も見られた。

そうした用例について、ジェンダーにとらわれぬ場合に“脱ジェンダー”という概念、男性に対して「女らしい」が、女性に対して「男らしい」が使われる場合に“逆ジェンダー”という概念を導入し、ジェンダーに拘泥する場合と対照させて、分析を試みた。以下で用例を検討しつつ、確認していきたい。

## 2. 「女らしい」はどのように使用されているか

今回対象とした漱石の10の作品における「女らしい」という語の用例数は

次のとおりである（カッコ内は以下で用例の出典を示すときの略称）。

用例数 坊っちゃん（坊）：1、虞美人草（虞）：0、三四郎（三）：2

それから（そ）：1、門（門）：1、彼岸過迄（彼）：4、行人（行）：3、

こころ（こ）：2、道草（道）：0、明暗（明）：2 合計 16例

後でみる「男らしい」と比較すると、半分以下の用例数である。数は多くないが、いくつかの特徴的な使い方が見られるので、以下でそれらを、

- 1) 男性に「女らしい」を使用する場合
- 2) 女性に「女らしい」を使用する場合
- 3) 女性に「女らしくない」を使用する場合

の順で見ていく。なお、以下の用例①～⑤の各々の【 】は「女（男）らしい」と形容される対象人物を示し、（ ）は誰の目からそう見えるのかという視点人物を示す。視点人物は無い場合もある。

#### 1) 男性に「女らしい」を使用する場合

- ①【赤シャツ】（坊ちゃん）・君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。どこまで女らしいんだか奥行がわからない。 （坊）
- ②【私=先生】（私=先生）・私は女らしくったのかもしれませんが。 （こ）

これらの例では、登場人物の男性の疑り深い、あるいは優柔不断な態度を批判的に言う場合に「女らしい」が用いられている。①では、すぐ後に、坊ちゃんが自分のことを、「憚りながら男だ。受け合ったことを裏へ廻って反古にする様なさもしい見は持っているもんか」と、赤シャツに対比させて言う言葉がある。②では、お嬢さんに対する態度について言っているのだが、これも後の方で、恋のライバルKについて「何処か間が抜けていて、それで何処かに確かりした男らしい所のある点も、私よりは優勢に見えました」と対比的に述べている。

①②は、男性に「女らしい」を使い、結果的に逆のジェンダーで形容していることになる用例である。以下このような場合を“逆ジェンダー”と呼ぶことにするが、①②の文脈を検討すると、男性に対する“逆ジェンダー”は、マイナス評価がなされていると言えよう。

2) 女性に「女らしい」を使用する場合

③【千代子】(須永)・千代子の言語なり挙動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に蔵しているからではなくって、余り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるからだと僕は固く信じて疑わないのである。(中略)僕は天下の前にただ一人立って、彼女はあらゆる女のうちに最も女らしい女だと弁護したいくらいに思っている。(彼)

④【嫂・直】(二郎)・嫂は席に着いた初めから寒いとって、猫背の人のように、心持胸から上を前の方に屈めて坐っていた。彼女のこの姿勢のうちには女らしいという以外に何の非難も加えようがなかった。(行)

③は「恐れない女と恐れる男」という言葉が出てくる少し前の箇所、千代子の女らしさが激しさとなって自分(=須永)に迫り、自分は「恐れる男」となって引いてしまうという心理を述べる場面である。④も、火鉢をはさみ、嫂が自分(二郎)の方へ近々と屈まってきて、生々しさを感じさせるのを受け止めかねている義弟の二郎の心理である。

いずれも女らしさの発現を単純には受容しがたい男性の心理状態を描いている。もちろん次のような、単純にプラス評価を読みとれる用例もある。

⑤【女中の作】(須永)・僕は鎌倉から新しい記憶を持って帰った反動として、その時始めて、自分の家に使っている下婢の女らしい所に気が付いた。(彼)

この場面は、③の後の場面だが、ここでは「女らしい所」を、作の「慎ましやか」「控え目」「憐れ深い」「安慰を得る」ような姿に見ている。千代子の「女らしさ」と対照させているわけで、作の「女らしさ」には“安慰”を得るが、千代子の「女らしさ」にはそれを得られないのである。すなわち、登場人物の女性らしさは、⑤のように単純にプラスの評価で扱われる場合もあるが、③④のように、圧迫を感じさせるような、マイナスの部分を持ったものとして扱われることもある、と言えよう。その場合、女性が女らしいのは好

ましいことだ、というジェンダーへの拘りは少ないものと考えられる。

### 3) 女性に「女らしくない」を使用する場合

登場人物の女性を「女らしくない」あるいは「女らしく～しない」とする場合、漱石では必ずしもマイナス評価ばかりで扱われてはいないのである。

⑥【美禰子】(三四郎)・この女は素直な足を真っ直ぐに前へ運ぶ。わざと女らしく甘えた歩き方をしない。(三)

⑦【岡本の叔母】(お延)・女らしい所がなくなってしまったのに、まだ女としてこの世の中に生存するのは、真に恐ろしい生存であるとしか若い彼女には見えなかった。(明)

⑧【岡本の叔母】(お延)・(夫より先に風呂へ入ろうとすることについて)叔父の潔癖を知って、みんなが遠慮するのに、自分だけは平気でこんな場合に、叔父の言葉通り断行して顧みない叔母の態度は、お延にとって羨ましいものであった。又忌わしいものであった。女らしくない厭なものであると同時に、男らしい好いものであった。(明)

前後の文脈を見ると、⑥の美禰子の例については、三四郎には批判めいた意図はなさそうである。後の方で、広田先生が美禰子と野々宮の妹のよし子を比べて、

⑨【よし子】(広田先生)・「野々宮の妹の方が、一寸見ると乱暴の様で、やっぱり女らしい。妙なものだね」(三)

と評する。しかし、作中でよし子のカゲは薄く、“女らしくない”ふるまいの美禰子は、三四郎の目からは魅力的に描かれており、「妙なものだね」という感想は、三四郎のものでもあっただろう。また、⑦⑧では、50歳を越えた叔母が、お延の目から“女らしい所がない”と批判的に描かれている。しかし、⑧の方では、「女らしくない」態度は「羨ましい」「好いもの」ともされている。女らしくない様子は、マイナスに描かれる反面、不思議に(妙に)惹きつけられるものでもあることが描出されているわけである。「女らしくない」、

即ちジェンダーを脱しようとする振る舞い（以下これを“脱ジェンダー”と呼ぶ）には単純にマイナス評価ばかりされてはいないのである。

### 3. 「男らしい」はどのように使用されているか

「男らしい」の用例数は次の通りである。

用例数 坊ちゃん：3、 虞美人草：1、 三四郎：1、 それから：0

門：1、 彼岸過迄：2、 行人：0、 ころも：2、 道草：3、

明暗：22 合計 35例

「女らしい」がこれらの作品で、合計16例であったのに比べると、この「男らしい」は2倍以上の用例数となり、特に「明暗」で22例というのが突出している。以下で、

- 1) 女性に「男らしい」を使用する場合
- 2) 男性に「男らしい」を使用する場合
- 3) 男性に「男らしくない」を使用する場合

に分けて、いくつかの特徴を見ていこう。

#### 1) 女性に「男らしい」を使用する場合

- ⑩【奥さん】（私＝先生）・何処かに男らしい気性を具えた奥さんは、何時私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。 （こ）
- ⑪【産婆】（健三）・一切も綺麗に始末されていた。（中略）産婆は笑うだけであった。若い時から独身で通してきたこの女の声や態度は何処となく男らしかった。 （道）
- ⑫【吉川夫人】（お延）・他に対して男らしく無遠慮に振る舞っている夫人が、自分にだけは、まるで別な人間として出てくるのではないかと思われた。 （明）
- ⑬【お延】（――）弱いものの虚を衝くために用いられる腕の力が、彼女を男らしく活発にした。 （明）

⑫は、批判的に見ているようであるが、会食の場で一座を仕切っている吉川夫人に対して、一面でコンプレックスも持っているお延から見ると、羨ま

しくもあるだろう。先の同じく「明暗」からの⑧で、叔母のふるまいを「女らしくない厭なものであると同時に男らしい好いもの」とお延に言わせたのと同一の感じ方が描出されている。

⑬は、従妹の継子とふざけあって争う場面で、作者の目から直接お延の活発さが好ましいものとして描写されている。

また、⑩は、奥さんのはっきりした実際家である性質を、中立的に述べていて、プラスマイナスどちらでもないと思われる。

すなわち、女性が、「男らしく」ふるまう“逆ジェンダー”は、決してマイナスとして描出されてはいない。ジェンダーへの拘りがここではあまり強くないのである。なお、偶然であろうが、これらの用例の作品は後期に集中している。

## 2) 男性に「男らしい」を使用する場合

単純にプラスのものとして使われる場合も少なくない。前にも触れた、「ころ」のKについての用例で、

⑭【K】(私=先生)・何処か間が抜けていて、それで何処かに確かりした  
男らしい所のある点も、私よりは優勢に見えました。(こ)

などがそうである。しかし、それよりも多いのは、

⑮【赤シャツ】(坊ちゃん)・赤シャツは気味の悪い様に優しい声を出す男  
である。(中略)男なら男らしい声を出すもんだ。(坊)

のように、「男らしい」状態でないものに対して、マイナスであるから「らしく」した方がよい、と希望したり押しついたり命令したりする場合である。特に、「明暗」にそうした例が多い。

⑯【父】(津田)・叱るならもっと男らしく叱ったら宜さそうなものなのに。  
(明)

のような例である。集中的に現れるのが、津田の過去の恋愛をめぐる津田と吉川夫人のやりとりで、夫人が頻繁に津田に対して「男らしい」を口にする。

「あったらあったと判然仰っしやいな、男らしく」をはじめとして、「聴きま  
すと男らしく云わなくちゃ」、「そんならもっと男らしくしちゃどうです」等々  
と続けざまに言い募る。ついに、夫人の目論む津田と元恋人との再会のため  
の温泉行きを、承知させるまでもっていかうと「是非いらっしやい。(中略)  
そうして男らしく未練の片を付けてくるんです」、「だから此所で持前の図迂  
図迂しい所を男らしく充分發揮しなさいな」とたたみかける。夫人は、【津田  
が男らしくすること＝元恋人の清子のいる温泉に行って話をすること】と巧  
みにすり替えて、誘導していく。すなわち、「明暗」においては、単純に男性  
の様子や状態をプラス評価して「男らしい」と言うのではなくて、“男らしく  
あれ”という文脈で使われる場合の方が多い、と言えよう。

津田は、「男らしく」を連発する夫人を冷笑し、いったい本当はどういう意  
味なのかと疑い、「男らしくない」と評されてもたいした苦痛を感じない、と  
言っている。それなのに夫人のすり替えに乗じて、“男らしいのはいいことだ”  
と、ジェンダーに従うふりをする。それどころか、後の方で、友人の小林に  
会った時、なかなか話に入らない小林を促すために、

⑩【小林】(津田)・「それより君の方でその主意を男らしく僕に説明してく  
れたら可愛いじゃないか」 (明)

と、男性のジェンダーへの拘りを自分も利用しさえする。

いずれにしても、この「男らしい」の男性の登場人物に対する用法に関し  
ては、「明暗」を中心として、望ましい、よいものとしてのプラス評価を与え  
た上で、それが無いということを非難しているように見えるのである。

次の「彼岸過迄」では、少し異なった「男らしさ」が語られている。

⑪【須永】(須永)・男らしくないとも、勇気に乏しいとも、意志が薄弱だ  
とも、他から評したらどうにでも評されるだろう。(中略)僕には自分に  
靡かない女を無理に抱く喜びよりは、相手の恋を自由の野に放ってやっ  
た時の男らしい気分で、わが失恋の傷痕を淋しく見つめている方が、ど  
の位良心に対して満足が多いか分からないのである。 (彼)

即ち、須永がストレートに千代子に向かって行けない自分の屈折した心理を語るのだが、ここでは、一般的には“男らしくない”ように見えることが、実は“男らしい”のだ、という論理がある。それとともに、女性が主体的に男性を選択すべきであること、そう考えて女性を束縛しないのが男らしいのだ、という主張があり、そのようになりたい、という須永流の「男らしさ」への拘りが見て取れる。

また、こうした、“男らしくあれ”という文脈中での「男らしい」の使用は、含意として“今現在は男らしくないじゃないか”という“脱ジェンダー”への非難を持ちうるため、次節の「男らしくない」と相通ずる部分もあり、合わせて考えた方がいいようだ。

### 3) 男性に「男らしくない」を使用する場合

まず、男性の登場人物が、自分や他の男性について、「男らしくない」を使う場合がいくつかある。たとえば、「道草」中に、昔、貰えるはずのものを貰えなかった不愉快な出来事を覚えている健三に、妻のお住が「執念深い」と言ったのに対して

⑱【健三】(健三)・「執念深かろうが、男らしくなかろうが、事実は事実だよ」 (道)

と答える場面。あるいは、「明暗」で、

⑳【津田】(津田)・いつまでも彼女を自分の傍に引き付けて置くのを男らしくないと考えた。 (明)

これらは、自分自身に対してマイナス評価をしている使い方である。こうした自己批判的な使い方も注目すべきではあるが、それより目立ったのは、女性の登場人物が視点人物となって、男性を「男らしくない」とする例である。たとえば、

㉑【義兄・甲野】(藤尾)・「よっぽど男らしくない性質ですね。」 (真)

㉒【健三】(お住)・細君の返事には男らしくもないという意味で健三を非難する調子があった。(道)

のような例であるが、特に、「明暗」では、前節の「男らしい」の使用状況と同じく、津田が対象となっているのが目を引く。

㉓【津田】(お延)・「貴方だってまさかそんな男らしくない事を考えていらっしゃるんじゃないでしょう」(明)

㉔【津田】(お延)・何故男らしく自分の弱点を妻の前に曝け出してくれないのかを苦にした。(明)

この㉔は、“男らしく～してくれない”という形なので、「男らしくない」に準じて考えることにする。その他、

㉕【津田】(吉川夫人)・「それが私に云わせると、男らしくない貴方の一番悪い所なんですよ」(明)

という例があった。㉑から㉕までの5例は、いずれも女性の視点人物からのマイナス評価として、「男らしくない」が使用されている。この時代、劣位ジェンダーと認識されていたであろう女性の側から、男性優位の立脚点である「男らしさ」が、ない、と指摘されるということは、かなりこたえることであつたに違いない。

漱石は、前節で見た、“男らしくあれ”という文脈で、あるいは、そして女性からの“男らしくない”という非難の文脈でなど、作品中で繰り返し「男らしい」という語を使っている。男性登場人物の“脱ジェンダー”には、マイナス評価がなされている、と言えよう。

#### 4. まとめ

以上、述べてきたところを振り返って要約してみる。まず、漱石の10作品における「女らしい」の使用傾向をまとめると、男性登場人物に「女らしい」を使うと、マイナス評価の意味となる。しかし、女性に「女らしくない」を

使っても必ずしもマイナス評価ばかりを意味しない。プラス面を見いだしている場合がある。女性に「女らしい」を使うと、プラス評価である場合もあるが、男性の視点人物から見て、女性の「女らしい」ふるまいに気圧されて、恐れさえいやくような、マイナス面が暗示されている場面もある。

即ち漱石のこれらの作品では、「女らしい」という語は、単純なジェンダー肯定ばかりには使用されない。また、男性が逆のジェンダーへ移動する、すなわち“逆ジェンダー”は容認しないが、女性の「～らしくない」という“脱ジェンダー”は容認しているようである。

次に、「男らしい」についてだが、女性登場人物に「男らしい」を使うと、マイナスばかりでなく、中立的ないしプラス評価の意味となる。しかし、男性に「男らしくない」を使う場合は、マイナス評価の意味であり、加えて、女性が視点人物である用例が目立った。男性に「男らしい」を使う場合は、“男らしくない”状況に対して“男らしくあれ”というような文脈で使用される場合が多く、単純に現実の男らしさを描出するような使い方は少ない。

即ち「男らしい」という語もやはり単純なジェンダー肯定ばかりには使用されない。女性の“逆ジェンダー”は容認するが、男性の“脱ジェンダー”は、容認していないのである。

## 5. 結 論

典型的なジェンダー意識の反映を意味として持つ「女らしい」「男らしい」の2語の使用状況から、漱石の10作品の登場人物については、女性のジェンダーに関しては拘らない、男性のジェンダーに関しては拘る、という描出のされかたである、と言えよう。もう少し詳しく言うと、女性の登場人物が、男性のジェンダーを志向しても、女性のジェンダーを脱しても、容認され、かえって、女性のジェンダーを押しだそうとすると、受け入れがたいという反応が、視点人物によってなされている場合もあった。一方、男性の登場人物は、女性のジェンダーを志向することは容認されず、男性のジェンダーを脱することも容認されがたい。そして、男性のジェンダーは、現状にない、あるいは対象人物の持っていない、望ましいものとして提示されている、と

言ってよい。

他にも、「女にしては」とか、「男振り」など、ジェンダーを示す語は存在するし、「女らしい」「男らしい」の用例数自体も少ないので、以上の結果を漱石のジェンダー意識のあり方に直接結びつけることは、危険である。しかしながら、たとえば、森鷗外の「洋行前にはまだどこやら少年らしい所があったのが、三年の間にすっかり男らしくなって、血色も好くなり、肉も少し付いている。(かのように)」とか、芥川龍之介の「が、ある刹那には女らしい疑いも閃かずにはいられなかった。(舞踏会)」といった、単純なジェンダー概念に沿った使い方に慣れていると、漱石の今まで見てきたような用例は、質・量ともに看過できないように思われる。

また、「女らしい」「男らしい」という語は、日本語の使い手が共通に持っている漠然としたイメージに訴えられる便利な語として、うっかり、考えなしに使ってしまう語でもある。それだけに使い手の中の自覚されないジェンダー意識の中味が反映しやすい語であると考えられる。

そのように考えると、漱石は、女性のジェンダーを肯定することに疑問を持ちつつ、男性のジェンダーについては、既存のものとして、あるべきものとして、否定をしかねていたように思われるが、どうであろうか。

もちろん、この時代にジェンダーという概念は明確には存在していなかった。語としての「女らしい」「男らしい」の意味・用法自体も100年前には今とは違っていたという可能性も無視できない。今後は、今回取り上げなかったそうした側面をも視野に入れながら、引き続き、このテーマを追求していきたいと思う。

#### 注

今回とりあげた作品名とその発表年は次のとおりである。

- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| ・坊っちゃん 明治39年(1906) | ・虞美人草 明治40年(1907)    |
| ・三四郎 明治41年(1908)   | ・それから 明治42年(1909)    |
| ・門 明治43年(1910)     | ・彼岸過迄、行人 明治45年(1912) |
| ・こころ 大正3年(1914)    | ・道草 大正4年(1915)       |

・明暗 大正5年(1916)

なお、「吾輩は猫である」(明治37年 1904)および「倫敦塔」(明治38年 1905)の2作品にもあたったが、「女らしい」「男らしい」両方とも用例が見当たらなかったため、上記には記さなかった。

テキストには新潮文庫を使用した。

(たかさき みどり)